

表紙解題

夜空に希望——「形」「色」、そして「もの」との対話——

紀井利臣

大脳は新皮質、旧皮質、古皮質に分けることができる。その98%を占める新皮質は、誕生当初から学習によって、それも五感のうち主に視覚により情報を集積していくと言われている。人間の造形活動の基礎的な部分は、こうした大脳生理学によって解明され、赤ん坊を絵や造形遊びで教育する根拠が解明されている。

白い紙に赤いリングが描かれて場合、それを見る私たちは「赤（色）」と「リング（形）」どちらを先に認識するのかといえば、ほとんどの場合「リング」の形であり、次に「赤」の色である。これは学習する過程において、文字を形として認識することに関係があると言われている。仮に伝達する文字が色であった場合、微妙に似た色では誤認識を起してしまう。文字の形は人間の生んだ偉大な遺産であるが、画家の感覚は形と色に加えて、触覚やその他の感覚までが加わってくる。

現代の我々は、「赤」と言えばすぐ頭に「赤い」色を概念としてイメージすることができ、それは20世紀以降、色彩理論が確立した後のことであり、19世紀以前では「赤いリング」、「赤いチューリップ」、「赤い絵の具」など具体的な「もの」で他者に色を伝達していた。そこでは「リング」の質感や密度、味覚を感じ取ると同時に、それを取り巻く空間、自身のイメージーションなどを総合的に認識する感覚を画家は必要としたであろう。色のみをイメージできる現代とは大きく異なっていた。

聖母マリアは赤い服の上に青いマントを着ている。赤はルビーで情熱と愛を表し、青はサファイアで誠実を表す。画家たちはこのような「形」と「色」、そして「もの」と対話していたのである。